

今年度第2回目となる外国語活動・外国語の研究授業を立野ちづる教諭が行いました。新型コロナウイルス感染症対策のため体育館で行いました。協議会では、絵本の活用方法や絵本を用いて英語の表現に慣れ親しみながら楽しく学習に取り組む工夫について意見交流を行いました。

指導・講評では、京都光華女子大学 こども教育学部 こども教育学科 教授 田縁 真弓先生をお招きして、ご指導をいただきました。

研究主題

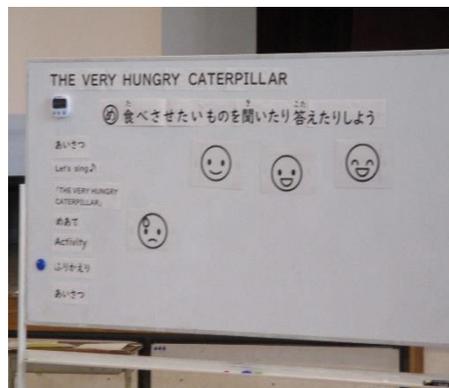
関わり合い、学びを広げ、深める児童の育成

～ 思いを豊かに表現できる授業づくりを通して～

授業者：特別支援4組 立野ちづる 教諭

単元名：The Very Hungry Caterpillar

指導講評：京都光華女子大学 こども教育学部 こども教育学科 教授 田縁 真弓先生より



〈研究経過報告〉

自由に話を作り自分たちの好きなものを使って絵本を作る活動なら児童が積極的に活動できると考え、単元計画および本時の活動を設定した。また、児童同士が関わり合い学びを深めることができるよう、以下の3つの視点での工夫を行った。

① 評価の工夫

振り返りカードの尺度は、めあてに合った具体的な行動を示す。振り返りカード記入前には、具体的な場面を示し、この時にこのような行動ができていたらここに○がつく、など分かりやすく伝える。また、振り返りの前だけではなく、めあての確認の時にも具体的な行動として示すようにする。これにより、児童がより分かりやすい目標をもって学習に取り組める。

② 目的・場面・状況等を明確にした言語活動の工夫

最終目標を自分たちのオリジナル「The Very Hungry Caterpillar」を作ることにする。自由に楽しいことを考えることが好きな児童が多いため、自分の考えを伝えたりや友達のことを知りたいという思いが高まり、友達との伝え合いがより積極的に行われると考えた。

③ 表現を繰り返し使うための工夫

絵本「The Very Hungry Caterpillar」を繰り返し聞いたり読んだりすることで、曜日や食べ物の表現に慣れ親しむ。友達との交流で、曜日や食べ物を尋ねたり答えたりする表現を繰り返し使うことで慣れ親しむ。

〈授業者自評〉

本時では児童が積極的に伝え合い、既習表現(What color do you like)を活かしたやり取りでできていた。一方で、やり取りの質は個によって差があるため、やり取りで使う表現について、教員がどこまで突き詰めて児童に求めればよいのか、いかに児童の意欲を低下させないようにすればよいのか活動させるのかということが難しく感じた。

〈研究協議会〉

研究の視点について

視点1 あおむしに食べさせたい食べ物を友達に聞いたり答えたりする活動が、表現を繰り返し使うための学習活動の工夫として効果的だったか。

・絵本の読み聞かせでは、児童が教師の発話や絵本の内容をよく聞き、理解しようとしていた。

⇒(田縁先生)児童が言いたいと思っている様子をくみ取り、実態に即して、一緒に発話し、どんどん児童に言わせたり一緒に口に出させたりする。わざとクイズを出して児童が英語で答えたいようになるように仕掛けをするのも効果的である。

視点2 オリジナルの絵本を作るというエンドプロダクトが、自分の考えを伝えたい、友達の考えを聞きたいという動機付けになっていたか。

・本時ではエンドプロダクトについての提示は強調しないものの、単元の導入として児童に「オリジナルの絵本を作る」と伝えている。本時では、児童は「The Very Hungry Caterpillar」に関心を持ち、あおむしに食べさせたい食べ物の言い方や形容詞を用いた表現を発話しようとしていた。

(質問)「あおむしにたべさせたいもの＝児童の好きなたべもの」という認識は児童にあったか。事前にそのような導入があったのか。

⇒めあてのことは特に児童に伝えず、「自分があおむしに食べさせたいもの」を言わせるように指導を行った。

(田縁先生)形容詞の要素を入れることによって、形容詞に意識が行き過ぎて本心ではなくなることもある。また、児童が知りたいという気持ちがあっても、その場で聞いただけでは児童の中に定着しない。定着させるためには、一時間分形容詞を学習する時間を確保して本時に生きるように単元計画を設定する必要がある。

(質問)児童の本当に言いたいことを伝え合うやりとりするにはどうしたらよいのか。

⇒(田縁先生)児童がしっかりと相手に自分の本当の思いを伝えるようになるためには、語彙力や単語力等英語力が必要であり、実際にそれができるようになるには、中学になってからでないと厳しいものがある。しかし、厳しい中でも、児童の実態に合わせて挑戦していくことが大切。

その他

・中間指導で教師が「sour lemon」という表現を使ったことで、後の「もっと詳しく」と声をかけたときに、児童から辛い・甘いなどの形容詞の表現に興味関心を向けることができていた。

→ただし、本時のめあてでは、文で言えなくても単語で言えたら良いため、単語だけの発話でも問題はない。

・児童のやり取りの内容や発話の内容を教員が把握し、中間指導で児童の質問を引き出すことができていた。

・中間指導の後に形容詞の確認時間があったため、児童が新たな語彙を獲得しその後のやり取りに活かすことができていた。

・ワークシートの説明が丁寧だった。教員の声掛けや評価内容の明示がしっかりできていたので、児童がスムーズに学習を振り返ることができていた。

・振り返りカードの書き方が明確であったが、途中で「2つ丸をつけて良い」としてしまうと、評価項目や内容がぼやけてしまうことがある。

→「聞く・答える」でどちらも「言えた」でくくって評価するよう指示したが、今後授業の内容や学習によって再度改善させて行くと良い。

→振り返りの意見を発表させなかったとしても、教員が全体の振り返りを伝えたり何人かの意見を全体に還元したりする時間があつたほうが良い。

〈指導・講評：京都光華女子大学 こども教育学部 こども教育学科 教授 田縁 眞弓先生〉

【本時の表現や語彙について】

・「What food」では意味がない。指導者が学習のハードルをどこまで上げるかを児童の実態を理解し学習を設定する。

・形容詞は本時と切り離して学習させ、1時間で確実に定着するよう指導をすべきである。これにより、本時でさらに児童が自身をもってやり取りできるようになり、児童のやり取りの質も高まる。

・On monday, he ate oo. but he still hungry.の定型文は慣れれば言えることが多いため、教員と一緒に発話させる場面を増やすとよい。

・絵本は長かったが、児童が集中して聞いていた。もっと児童と一緒に発話しながら絵本を扱うことで、英語にさらに慣れ親しむことができた。言える単語 (On monday, he ate oo. but he still hungry など何度も繰り返させる文) については、一緒に言ったり児童に言わせたりすることも大事である。

【評価について】

振り返りシートの項目で、児童が2箇所丸をつけると、教員も児童も「どこまでなにができたか」が分からなくなってしまう。「足場かけ(児童の学習および問題解決を促すために、教師が学習者をサポートすること)があってやりとりができる」と「表現をつかうことができる」など、評価項目の整理をすると、児童が明確に評価項目を理解しやすく、より明確に振り返りを行うことができる。

【絵本の活用について】

- ・想像力を働かせるための有効な方法の一つであるため、授業でさらに活用すると良い。
- ・本が大きすぎてぺらぺらすることがあるため、児童全員に確実に本の絵が見えるように読むように留意すること。

【絵本を用いた指導について】

- ・効果: 子供は2回聞いたら教員と一緒に発話できるようになり、音声と単語の意味をリンクさせて理解できる。
内容を推測しながら理解できる。
文脈の中で自然に英語に触れ習得することができる。

【本の選定について】

低学年: 1文が3単語以内でかつ様々な音が出てくるもの

中学年: 内容がストーリー性のあるもの

高学年: 手元で文字が見られるようになっているもの、社会的なことが絡んだもの

※6分程度で1文が3語以内になっている絵本が良いとされている。

→一人で読んで、3分以上になったら分量を減らす必要がある。

What's next? など短い発問や児童とのやり取りを交えた読み聞かせを行うことで、学習を楽しくより対話的な活動にすることができる。

【絵本を活用したクイズ】

- ・話の順番を当てたり並び替えさせたりする。(ストーリーテリング活動のようなもの)
- ・単語や色などを答えさせる。(メモリークイズ)
※ミッシングゲームなど他のゲームも絵本と関連づけ進めることができる。